

公演日程

A PROGRAM

第1691回 NHKホール
1/8[土] 開演 6:00pm
1/9[日] 開演 3:00pm

The 1691st Subscription Concert
on 8th (Sat.) & 9th (Sun.) Jan.
at 6:00pm (Sat.) 3:00pm (Sun.) in the NHK Hall

- 指揮／ワシーリ・ペトレンコ
- ピアノ／小菅 優
- コンサートマスター／篠崎史紀

Vasily Petrenko, conductor
Yu Kosuge, piano
Fuminori Shinozaki, concertmaster

ベートーヴェン／ピアノ協奏曲 第1番 八長調 作品15(35') Ludwig van Beethoven (1770-1827)
Piano Concerto No.1 C major op.15

- I アレグロ・コン・ブリオ
- II ラルゴ
- III ロンド：アレグロ

- I Allegro con brio
- II Largo
- III Rondo: Allegro

休憩

Intermission

チャイコフスキー／交響曲「マンフレッド」 作品58 (57') Pëter Il'ich Tchaikovsky (1840-1893)
Manfred Symphony op.58

- I レント・ルグブレ
- II ヴィヴァーチェ・コン・スピリト
- III アンダンテ・コン・モート
- IV アレグロ・コン・フォーコ

- I Lento lugubre
- II Vivace con spirito
- III Andante con moto
- IV Allegro con fuoco

●今月の開演前の室内楽

Aプロ

1/8 (土) 5:15pm ~
1/9 (日) 2:15pm ~

〈出演〉 甲斐雅之 (フルート)、井野邊大輔 (ヴィオラ)、
井戸田善之 (コントラバス)

Cプロ

1/14 (金) 6:15pm ~
1/15 (土) 2:15pm ~

〈曲目〉 シュルホフ／コンチェルティーノ

〈場所〉 NHKホール2階北側ロビー

公演日程

B PROGRAM

第1693回 サントリーホール
1/19[水] 開演 7:00pm
1/20[木] 開演 7:00pm

The 1693rd Subscription Concert
on 19th (Wed.) & 20th (Thu.) Jan.
at 7:00pm in the Suntory Hall

- 指揮／イオン・マリン
- コンサートマスター／堀 正文

Ion Marin, conductor
Masafumi Hori, concertmaster

ブラームス(ドヴォルザーク編) /
ハンガリー舞曲集より 第 17, 18, 19, 20, 21 番 (12')

Johannes Brahms (1833-1897)
Antonín Dvořák (1841-1904)
Ungarische Tänze-Nos.17, 18, 19, 20, 21

ブラームス /
ハイドンの主題による変奏曲 作品 56a (18')

Johannes Brahms
Variation über ein Thema von Haydn
op.56a

休憩

Intermission

ブラームス(シェーンベルク編) /
ピアノ四重奏曲 第 1 番 ト短調 作品 25 (46')

Johannes Brahms
Arnold Schönberg (1874-1951)
Piano Quartet No.1 g minor op.25

- I Allegro
- II 間奏曲：アレグロ・マ・ノン・トロッポ
- III アンダンテ・コン・モート
- IV ロンド・アラ・ジンガレーゼ：プレスト

- I Allegro
- II Intermezzo: Allegro ma non troppo
- III Andante con moto
- IV Rondo alla zingarese: Presto

公演日程

C

PROGRAM

第1692回 NHKホール
1/14[金] 開演 7:00pm
1/15[土] 開演 3:00pm

The 1692nd Subscription Concert
on 14th (Fri.) & 15th (Sat.) Jan.
at 7:00pm (Fri.) 3:00pm (Sat.) in the NHK Hall

- 指揮／イオン・マリン
- コンサートマスター／堀 正文

Ion Marin, conductor
Masafumi Hori, concertmaster

ムソルグスキー（リムスキー・コルサコフ編）／
交響詩「はげ山の一夜」（10'）*

Modest Mussorgsky (1839-1881)
Nikolai Rimsky-Korsakov (1844-1908)
"Une nuit sur le mont chauve", sym. poem*

ラヴェル／組曲「クーブランの墓」（17'）

Maurice Ravel (1875-1937)
"Le tombeau de Couperin", suite

- I 前奏曲
- II フォルラーヌ
- III メヌエット
- IV リゴードン

- I Prélude
- II Forlane
- III Menuet
- IV Rigaudon

休憩

Intermission

ムソルグスキー（ラヴェル編）／組曲「展覧会の絵」（33'）

Modest Mussorgsky
Maurice Ravel
"Tableaux d'une exposition", suite

*一部、原典版使用

* partly original version



©Mark McNulty

指揮 conductor
ワシーリ・ペトレンコ
Vasily Petrenko

1976年にレニングラード（現サンクトペテルブルク）で生まれたワシーリ・ペトレンコは、サンクトペテルブルク音楽院に入学し、イリヤ・ムーシンに指揮法を師事。マスタークラスで、マリス・ヤンソンス、テミルカノフ、サロネンからも指導を受けた。1994～1997年にムソルグスキー記念歌劇場の常任指揮者を務める一方で、「ショスタコーヴィチ合唱指揮コンクール」（1997年）とスペインの「第6回カダケス国際指揮者コンクール」（2002年）で第1位、「第4回プロコフィエフ国際指揮者コンクール」（2003年）で第2位を獲得。2004年から2007年にかけて、サンクトペテルブルク国立アカデミー交響楽団の首席指揮者を務めた。2004年11月に、初めてロイヤル・リバプール・フィルハーモニー管弦楽団に客演したペトレンコは、2006年秋から同団のプリンシパル・コンダクターに就任し、2009年にはチーフ・コンダクターのタイトルが贈られ、2015年まで契約を延長したことが公にされている。現在は、イギリスのナショナル・ユース・オーケストラの首席指揮者も兼任している。

レコーディングでも活躍しており、チャイコフスキーの《交響曲「マンフレッド」》を収録したディスクで、2009年の「グラモフォン賞」を受賞。2010年には、イギリスの「ブリット・アワード」クラシック部門の「男性アーティスト」に選出された。母国のサンクトペテルブルク・フィルハーモニー交響楽団やモスクワ・フィルハーモニー管弦楽団の指揮台に立つ一方で、2010年6月には、ヴェルディの《マクベス》でグラインドボーン音楽祭にデビュー。世界中の有力オーケストラへの客演に加え、パリ・オペラ座やハンブルク州立歌劇場で指揮し、チューリヒ歌劇場にデビューすることも決まっている。N響には、今回が初登場となる。

（満津岡信育）



指揮 conductor
イオン・マリン
Ion Marin

1960年、ルーマニアの首都ブカレスト生まれ。生地のジョルジュ・エネスコ音楽院でピアノと指揮を学び、さらにザルツブルクのモーツァルテウム音楽院、シエナのキジアーナ音楽院で学ぶ。ルーマニアを出国後、1987年から1991年までウィーン国立歌劇場で専任の指揮者を務め、数多くのオペラ公演を指揮する。1991年11月、ヴェネツィアのフェニーチェ歌劇場にモーツァルト《フィガロの結婚》で初出演。1992年4月、パリのオペラ・バステューユにオッフエンバック《ホフマン物語》で初出演。同年10月にはメトロポリタン歌劇場にロッシーニ《セミラーミデ》で初出演。近年のオペラ活動としては、2007年と2008年、チューリヒ歌劇場でロッシーニ《シンデレラ》、2009年3月、コヴェントガーデン王立歌劇場でモーツァルト《フィガロの結婚》、2010年2~4月、デンマーク国立歌劇場でのストラヴィンスキー《道楽者のなりゆき》などが挙げられる。

演奏会の指揮者としても極めて精力的に活動しており、ロンドン交響楽団、ロンドン・フィルハーモニー管弦楽団、バイエルン放送交響楽団、ミュンヘン・フィルハーモニー管弦楽団、ドレスデン・シュターツカペレなど各地のオーケストラを指揮している。近年の主な演奏会としては、2008年8月、プラハにおける第1回「ドヴォルザークのプラハ」音楽祭の開幕公演で、チェコ・フィルハーモニー管弦楽団を指揮して《交響曲第9番「新世界から」》を演奏。2009年4月、デンマーク国立放送交響楽団を指揮してマーラーの大作《交響曲第8番》を演奏。2010年6月には、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団の恒例のワルトビューネでの野外演奏会に出演、ソプラノのルネ・フレミングと共演している。NHK交響楽団とは2008年5月に共演、ショスタコーヴィチの《交響曲第5番》が大きな評判となった。

(吉田光司)

ピアノ piano

小菅 優

Yu Kosuge



©Steffen Janicke

現在、最も注目されている若手ピアニストの一人。NHK交響楽団とは2003年、2007年、2008年と共演を重ねる。特に2008年9月の定期公演では、タン・ドゥンの《ピアノ協奏曲「ファイア」》の日本初演を担った。同年、ロジャー・ノリントン&シュトゥットガルト放送交響楽団の来日公演でベートーヴェンの《ピアノ協奏曲第4番》を弾く。2009年には小澤征爾指揮水戸室内管弦楽団とメンデルスゾーンの《ピアノ協奏曲第1番》を共演。2010年夏のザルツブルク音楽祭では、急病のイーヴォ・ポゴレリチの代役として、フィリップ・ヘレヴェッツへ指揮カメラータ・ザルツブルクの演奏会でショパンの《ピアノ協奏曲第2番》を弾いた。同夏、サイトウ・キネン・オーケストラとも共演。

東京生まれ。10歳の頃にドイツへ渡る。ドイツ青少年音楽コンクールなどで優勝を重ね、15歳で初CD録音を行う。ザルツブルク・モーツァルテウム音楽大学卒業。

2005年にカーネギー・ホール内のワイル・リサイタル・ホールにデビュー。2006年にはザルツブルク音楽祭に日本人ピアニストとしては内田光子に次いで2人目のリサイタル・デビューを果たす。

かつて彼女にインタビューしたとき、「今、ベートーヴェンの後期の弦楽四重奏曲に凝っているんです」という発言を聞いて、いささか驚いたことがある。単にピアノを勉強するだけではなく、音楽に幅広く関心を持ち、たくさん吸収しようという好奇心が彼女の演奏を支えているのだろう。現在、ベートーヴェンのピアノ・ソナタ全曲シリーズに取り組み、その1回目の演奏会を2010年10月に開いたばかり。本日のベートーヴェンの《ピアノ協奏曲第1番》も楽しみだ。

(山田治生)

ベートーヴェン

ピアノ協奏曲 第1番 ハ長調 作品15

若く才能豊かなピアニストにとって、ピアノ協奏曲は、未知の楽壇に自分を送り込む最良のパスポートとなる。若き日のルートヴィヒ・ファン・ベートーヴェン（1770～1827）も同じ道を通った。彼もまた、ピアノ協奏曲を通して、広くウィーンの聴衆に自分の才能を示したのだった。しかし、1つ付け加えておかなければならない。ベートーヴェンが弾いていたのは、他ならぬベートーヴェンの協奏曲であったということ。つまり、彼にとって、ピアノ協奏曲とは、演奏の才だけでなく作曲の才も同時に示すための媒体だったのだ。

かくしてベートーヴェンは、生涯に5つのピアノ協奏曲を完成させる。今日演奏される《第1番》はその最初期のものである。「最初期の」などという、もったいぶった言い方をするのは、この作品もまた成立過程が複雑で、気持ちよく「最初の」とは言えないから。《第1番》は第1稿（1795）と最終稿（1800）の2つの版があるのだが、前者は次の《ピアノ協奏曲第2番》の最終稿（1798）より早く、後者はそれより遅い。要するに、こんがらがっているのだ。いずれにせよ、今日の《ピアノ協奏曲第1番》には、ベートーヴェンの青春が刻印されている。ハイドン、モーツァルトら、先達に学びながら、しかし、独自のものを押し出していくこの若者の気概が頼もしい。

全体は、型どおり、急-緩-急の3楽章

からなり、第1楽章に大きなカデンツァが入る。**第1楽章** アレグロ・コン・ブリオ ハ長調。キラキラと輝くハ長調で第1主題がはじまるが、そのあとの第2主題では柔らかな変ホ長調にいく。そして、またハ長調に戻ってピアノの登場。実は、これは「ん?」と思わせる展開。簡単にいえば、とても色彩的な効果がある。華やかなピアノの技巧もさることながら、「それだけではないのだよ」とニヤリと笑うベートーヴェンが見えるよう。**第2楽章** ラルゴ 変イ長調。第2楽章の調性を、主調から長3度下にとり、というの斬新。しかし奇をてらったものではない。この心の奥底から湧き上がってくるような歌には、やはり、甘い変イ長調がしっくりくる。**第3楽章** ロンド：アレグロ ハ長調。そして最後はお祭り。ベートーヴェンらしいスパイスの利いたリズムが、おどけた舞踏を盛りたてる。オーケストラの堂々たる扱いは、さすがは未来の交響曲作家のもの。ありあまる才能を大都会で存分に発揮する若者の肖像がここにある。

作曲年代：1793～1800年。第1稿完成は1795年、最終稿完成は1800年

初演：1795年3月。ベートーヴェンのピアノ・ソロによる

楽器編成：フルート1、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ1、弦楽、ピアノ・ソロ

(藤田 茂)

チャイコフスキー

交響曲「マンフレッド」作品 58

バラキレフ（1836〔旧ロシア暦。西暦では1837年〕～1910）は長くロシア音楽界に君臨した。4歳若いピョートル・イリイチ・チャイコフスキー（1840～1893）も彼に一目おき、《ロメオとジュリエット（初版）》（1869）は創作から初演まで、年長者への絶対服従の成果ともいえる。バラキレフは一時期音楽界から退いたが、復帰間もない1882年秋、『マンフレッド』（バイロン原作／1817）による創作を彼に勧める。1868年この先輩（当時31歳）がベルリオーズ（同65歳）に打診して断られたいわくつきの提案で、「固定楽想」の使用や4つの楽章と主題の調性など、バラキレフはチャイコフスキーに細かい指示を与えた。すでに欧米音楽界の認知と皇帝の庇護を得ていたチャイコフスキーは、1884年秋、この先輩からの催促に「全力をつくして実行する」と約束。スイス療養中の元恋人コーテク青年を見舞った後の翌春に作曲を開始し、9月22日に総譜を書き終えた。

彼が初めて構えたわが家（マイダノヴォ）で完成した最初の大作であり、1880年代前半、私生活の苦悩から逃れるべく憑かれたように書いた作品群——《マゼッパ》などのオペラ、《管弦楽組曲第2番》《ピアノ三重奏曲》ほか——の1つである。

チャイコフスキーはバラキレフ案の第2・3楽章の順序を入れ替え、一部の調性はバラキレフ案を採用した。1893年に回顧するように〈苦労した〉という言葉を残している。各

楽章の冒頭にチャイコフスキーは、ウラディーミル・スタソフ台本・バラキレフ作曲の版のプログラムを、自らロシア語とフランス語に改編して添付し、この作品をバラキレフにささげた。彼はこの先輩に生涯、親しみを感じなかったものの、その助言を尊重し1888年にも自作《ハムレット》の総譜を贈っている。

この交響曲は長大なためあまり演奏されないが、キュイが評価した数少ないチャイコフスキー作品である。そして彼の新しい個性を伝える注目作で、彼が使ったもとも大規模な楽器編成による。また当時としては珍しく、弦楽器の運弓法や管楽器の奏法などの詳しい指示がある。さらに彼好みのユニゾンやオクターヴが目立つとはいえ、バス・クラリネット、第3ファゴットとホルネット、さらにハーブ2つの巧みな使用などが、豊かな効果を生み出している。ロシア音楽界への影響も大きく、リムスキー・コルサコフの《シェエラザード》（1888年10月22日初演）は控えめな楽器編成ながら、その多楽章構成と全体をつらぬく示導動機（ライトモチーフ）は《マンフレッド》を想起させる。また若きグラズノフやイッポリトフ・イワーノフにも感銘を与え、特にグラズノフはその楽器使用を絶賛して、グリンカの《ルスランとリュドミーラ》（1837～1842）以後の「祈祷書」、また「芸術の福音書」になるだろうという言葉作曲者に送っている。なおバイロン人気のためか西欧諸国でも演奏され、ドイツの

音楽学者リーマンが興味深い考察を行っているし、ワーグナー《ワルキューレ》《トリスタンとイゾルデ》の主題との関連などもよく指摘される。

初演は1886年3月11日。モスクワ。楽友エルトマンズデルファー（ドイツ人）指揮。作曲者は具体的な指示を記入した総譜を彼に贈っている。初演後チャイコフスキーは一部分に変更を加えたが結局その変更だけでは満足せず、第1～3楽章を破棄して交響詩に改編したいなどと記している。

第1楽章 レント・ルグブレ ロ短調 4/4 拍子。アルプスをさまようマンフレッド。生きるという宿命の問題に悩み、望みなき憧れと過去の罪の記憶に苦しむ。彼はむなしく忘却を熱望するが、かつて熱愛しながら失ったアスタルテの思い出にさいなまれる。ファゴットとバス・クラリネットのユニゾンが印象的。

第2楽章 ヴィヴァーチェ・コン・スピリト ロ短調 2/4 拍子。アルプスの精が滝の虹の下で、マンフレッドの前に現れる。

第3楽章 アンダンテ・コン・モート ト長調 6/8 拍子。パストラーレ。山岳人たちの素朴で自由な生活を描く。総譜冒頭に鐘のサイズとその設置場所を付記。1885年9月11日完成。

第4楽章 アレグロ・コン・フォーコ ロ短調 4/4 拍子。地獄の酒宴。中央にマンフレッド。アスタルテの霊のよびかけ。マンフレッドは救われ、天に召される。第1楽章の冒頭素材や抜粋を織りこみ、コーダでグレゴリオ聖歌

《怒りの日 Dies irae》（レクイエム所収）を響かせる。ベルリオーズやリストなど19世紀の作曲家ご愛用のこの聖歌旋律を、彼は《管弦楽組曲第2番》、ピアノ曲《葬送行進曲》など計4作品で使っている。

作曲年代：1885年4月～9月22日

初演：1886年3月11日。モスクワ。エルトマンズデルファー指揮

楽器編成：フルート3（ピッコロ1）、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン1、クラリネット2、バス・クラリネット1、ファゴット3、ホルン4、トランペット2、コルネット2、トロンボーン3、テューバ1、ティンパニ1、シンバル、大太鼓、タムタム、トライアングル、鐘、タンブリン、ハーブ2、オルガン1（原譜ではハーモニウム）、弦楽

〈 〉は作曲家の書き言葉。日付は旧ロシア暦。

ブラームス (ドヴォルザーク編)

ハンガリー舞曲集より第 17、18、19、20、21 番

ヨハネス・ブラームス (1833~1897) がハンガリー音楽を知るのは、1850 年代初めにハンガリーのヴァイオリニスト、エドゥアルト・レメニ (本名ホフマン) と接したことが大きな契機となっている。ブラームスの遺品には、ブラームスの手でハンガリー音楽の旋律断片が 15 曲 (1 曲重複しているので 14 曲) を記載した手稿譜が残されている。これはレメニの演奏を採譜したもので、これがブラームスの一連のハンガリー様式による音楽の原点であった。

ブラームスが大衆的な人気を博したのは、1869 年と 1880 年に刊行された「ハンガリー舞曲集」(全 4 集) によってである。この人気は絶大で、ブラームスの名前を全ドイツ語圏だけではなく、国外にも広めるのに貢献した。全 21 曲のうち 3 曲を除いて、すべてハンガリーのチャールダーシュや民謡から旋律を取り入れている。第 17~21 番はその第 4 集にあたる。

この作品はさまざまな形の編曲版が作成された。オーケストラ編曲では第 1 番、第 3 番、第 10 番についてはブラームス自身が編曲を手がけ、そのほかハレーン (第 2 番、第 7 番)、パーロー (第 5 番、第 6 番、第 11~16 番)、ドヴォルザーク (第 17~21 番) などがオーケストラ編曲を行った。ドヴォルザークの編曲は、その楽器編成はブラームスのものを基本的に踏襲しており、原曲刊行の翌年、1881 年に

行われた。ドヴォルザークは《スラヴ舞曲第 1 集》をちょうど作曲・出版した時期で、その経験がこのオーケストラ編曲に存分に活かされている。メランコリックな部分は弦楽器主体で、躍動的な部分では打楽器を効果的に用いて祝祭的な雰囲気醸し出している。

第 17 番 アンダンティーノ 嬰へ短調。歌曲に由来し、しっとりとした旋律が魅力的である。**第 18 番** モルト・ヴィヴァーチェ ニ長調。あたかもお祭り騒ぎの喧騒を思わせる活気ある作品で、打楽器を効果的に用いている。**第 19 番** アレグレット ロ短調。チャールダーシュ独特のテンポの緩急の変化を絶妙なオーケストレーションで表現した作品。**第 20 番** ポーコ・アレグレット ホ短調。開始におけるラッシュューのメランコリックな旋律が印象的である。フリッシュの部分は躍動的で、よい対照を成している。**第 21 番** ヴィヴァーチェ ホ短調。回転するような舞曲のリズムと旋律が特徴的である。

作曲年代：ピアノ連弾のための《ハンガリー舞曲第 4 集》1880 年刊行 / ドヴォルザークによる編曲版：1881 年

楽器編成：フルート 2 (ピッコロ 1)、オーボエ 2、クラリネット 2、ファゴット 2、ホルン 4、トランペット 2、トロンボーン 3、ティンパニ 1、大太鼓、シンバル、トライアングル、弦楽

(西原 稔)

ブラームス

ハイドンの主題による変奏曲 作品 56a

ヨハネス・ブラームスの創作活動にとって《交響曲第1番》(1876年)が大きな節目となったことは言うまでもないが、それを準備したのが《ドイツ・レクイエム》(1868年)と《ハイドンの主題による変奏曲》(1873年)だった。前者は社会的な反響、つまり一人前の作曲家として広く認知されたという理由で、後者は個人的な自信、つまりオーケストレーションの技法を習得できたという理由で《交響曲第1番》へと道が通じているのである。

以前から変奏曲はブラームスの得意とする分野だったが、彼はこの作品で変奏の技法を二重にも三重にも組み合わせ、緻密で無駄のない独自の表現に到達した。古典的な衣裳をまとっているせいだろうか、斬新な内容にもかかわらずウィーンでの初演は大きな成功を取めたが、どれだけ作品の本質が理解されたのかは、はなはだ心許ないところ。なぜなら、もともと変奏曲というものは、つねに主題が透けて見えるのが通り相場なのだが、この主題と8つの変奏、そして終曲からなる作品では、ほとんど聴きとれないほど主題は分解され、それぞれの変奏が再構築されて新たに生まれ変わっているからである。

そして主題提示におけるオーケストレーションにも斬新な発想がうかがえる。当時の常識として主題の担い手は、たと

え他の楽器を重ねるにしても、あくまでもヴァイオリンだったはずなのだが、ブラームスは総譜浄書の段階まで残っていたヴァイオリンを最終的に削除してしまった。同じ措置は《交響曲第4番》終楽章の主題提示にも姿を現すことになるが、こうして古典的な楽器編成をとりながら、古典的ではない管弦楽法を選択するところに、保守性と革新性がないまぜになったブラームスの姿勢を見て取ることができる。

作曲年代：1873年

初演：1873年、ウィーン

楽器編成：フルート2、ピッコロ1、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、コントラファゴット1、ホルン4、トランペット2、ティンパニ1、トライアングル、弦楽

ブラームス（シェーンベルク編）

ピアノ四重奏曲 第1番 短調 作品25

ブラームスの《ピアノ四重奏曲第1番》をオーケストラに編曲する作業は、シェーンベルクが当時アメリカに亡命してロサンゼルスによく住まいを定めていた1937年になされた。ロサンゼルス・フィルハーモニー管弦楽団の指揮者であったオットー・クレンペラーの強い希望によって依頼されたものであった。

すでにバッハのコラールやオルガン曲、ヨハン・シュトラウスの作品を編曲していたシェーンベルクには自信もあったのだろう。後に音楽評論家のフランケンシュタインの質問に、手紙で次のように答えている。「私はこの作品が好きです。滅多に演奏されない曲で、優れたピアニストと演奏すると、ピアノ・パートがうるさくなり弦の音が何も聞こえなくなってしまっ、まずい演奏になることが常です。私はすべてのパートが聴こえるように編曲したかったのです」と述べている。また編曲に際して注意を払ったこととして、「ブラームスの書法を厳格に残し、もし彼が今も生きていて、自ら編曲を行ったとしてもそれと変わらないようにしました」と述べている。

「ブラームスの書法に厳格」であるという傾向は、とりわけ第1楽章に顕著に見られる。しかしながら管楽器や打楽器を加えるということは、原曲の《ピアノ四重奏曲》に音色の補充をすることでもある。

シェーンベルクのオーケストレーションは、ブラームスの交響曲の場合より現代的な響きをもたらしている。管楽器に旋律を演奏させ、終楽章ではブラームスが交響曲で用いることはなかった小太鼓、トライアングル、タンブリン等を使っている。こうした工夫は、原曲をより発展させる意味で用いられているといえよう。シェーンベルクのオーケストレーションは、ブラームスの原曲に秘められていた美しさをより明白に顕在化させることに貢献しているのである。

作曲年代：1937年

初演：1938年5月7日、ロサンゼルス
のフィルハーモニック・オーデトリウムにて、オットー・クレンペラー指揮、ロサンゼルス・フィルハーモニー管弦楽団

楽器編成：フルート3（ピッコロ1）、オーボエ3（イングリッシュ・ホルン1）、クラリネット2（バス・クラリネット1）、Esクラリネット1、ファゴット2、コントラファゴット1、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ1、ティンパニ1、大太鼓、シンバル、グロックンシュピール、トライアングル、シロフォン、小太鼓、タンブリン、弦楽

（上野大輔）

ムソルグスキー（リムスキー・コルサコフ編） 交響詩「はげ山の一夜」

ロシアには「イワン・クパーラの祭」（6月24日）という祭がある。イワンは洗礼者ヨハネのことだが、クパーラは夏の神。10世紀にロシアに導入されたキリスト教（ロシア正教）が、それ以前に行われていた夏至の祭を聖ヨハネ祭と結びつけて取り込んだのである。だからこの正教のお祭は、一皮めくれば異教的なフォークロアが顔を出す。実際、ウクライナの言い伝えによれば、この祭の前夜にはトリグラフ山（3つの山頂を持つはげ山）に魔女たちが集まってサバト（集会）を催す、という。ムソルグスキー（1839～1881）の交響詩《はげ山の一夜》は、この夏至祭のフォークロアと深く結びついている。

もともと、この作曲家の常で、曲の形は二転三転した。最初ムソルグスキーは、ゴーゴリの小説『イワン・クパーラの前夜』で歌劇を企てたが実現せず、続いてメンゲデン男爵の戯曲『魔女』の付随音楽で同じ題材を試みたが、未完に終わった。その後、いったんは管弦楽曲（いわゆる原典版）としてまとめたが、演奏も出版もされず、晩年にはゴーゴリ原作の歌劇《ソロチンスクの市いち》に転用しようとしたが、やはり完成しなかった。このとき作られた独唱・合唱入りの版が現行の版の母体で、これはムソルグスキーの死後、作曲者と親しかったリムスキー・コルサコフ（1844～1908）により整えられた。本日演奏される

のは、そのリムスキー版に原典版の一部を加えたものである。

リムスキー版に拠って曲の大まかな流れをたどると——地下からの轟音ごうおんに続いて悪鬼たちが登場。やがて黒ミサが始まるが、讃えられているのは黒い神チェルノボーグ。白い神ペロボーグと対をなす悪神である。その取り巻きの中には、ストラヴィンスキーの《火の鳥》で有名な魔王カシチェイもいるらしい。黒ミサの狂乱が頂点に達したところで、夜明けの鐘が鳴り、悪魔や魔女たちは退散する。

なお、この作品は、1889年のパリ万博のロシア音楽フェスティバルにおいて、リムスキーの指揮で紹介されている。そして、2日にわたったこのフェスティバルの聴衆の中に、のちにフランスを代表する作曲家となる14歳の少年がいた。モーリス・ラヴェルである。

作曲年代：1867年（原典版）、1872年（第2稿）、1880年（第3稿）／リムスキー・コルサコフによる編曲版：1886年

初演：1886年10月15日、ベテルブルクにおけるロシア交響楽演奏会。リムスキー・コルサコフ指揮

楽器編成：フルート2、ピッコロ1、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、コルネット2、トロンボーン3、チューバ1、ティンパニ1、大太鼓、タンブリン、小太鼓、トライアングル、タムタム、シンバル、弦楽

（近藤秀樹）

ラヴェル

組曲「クープリンの墓」

管弦楽の魔術師として知られるラヴェル(1875~1937)だが、最初から管弦楽のために書かれた作品は少ない。《クープリンの墓》も原曲はピアノ曲。「墓 tombeau」は「~を偲^{しの}んで」というほどの意味で、17~18世紀のフランスでは、作曲家たちは師や友人を偲ぶために tombeau を書くのが習いであった。ラヴェルはクープリンとその時代のフランス音楽を讃えるのに、当時の習慣をもつてしたわけである。

この擬古典的作品は、書かれた時期がもう少し早ければ、ドビュッシー《ベルガマスク組曲》のように、ヴェルレーヌやワトーを通して、理想化された18世紀の像を結んだだろう。逆に遅ければ、ストラヴィンスキーのように、鋭い異化作用を古典に及ぼしたかもしれない。だが、第一次世界大戦中に書かれた《クープリンの墓》は、そのどちらとも微妙に異なる曲となった。

この組曲の6つの小品は戦死した友人たちに捧げられ、初版楽譜の飾り扉には作曲者の筆で骨壺が描かれた。ここには戦争の影があり、愛国心の発露がある。ただ、その発露に「墓」という古式を選んだラヴェルは、偏狭なドイツ音楽排撃運動には加わらなかった。この「古い皮袋に注がれた新しい酒」の味は、なかなか微妙である。

1919年にラヴェルはこの組曲中の4曲を小編成の管弦楽のために編み直した。この管弦楽版は、スウェーデン・バレエ団によりバ

レエ化もされている。

原曲はクラヴサン曲を思わせる鋭い輪郭と透明な響きが特徴だが、管弦楽版には少し鄙^{ひな}びた、田園風の味わいがある。第1曲《前奏曲》と第3曲《メヌエット》の主題をオーボエに委ねたためもあるが、編曲に際して《フーガ》と《トッカータ》を省いたことも無関係ではあるまい。また、もともと《メヌエット》の中間部は田舎風のミュゼットである。とはいえ、第2曲《フォルラーヌ》には、付点音符で跳ね上がる主題や高音域でぶつかる2度など、ラヴェルらしい辛味がある。一方、第4曲《リゴードン》の快活さはシャブリエを連想させる。ちなみにラヴェルは《クープリンの墓》原曲を完成した直後、ロシア・バレエ団の注文でシャブリエの《はなやかなメヌエット》を管弦楽化している。

だが、管弦楽の魔術師ラヴェルにとって最大の「編曲」の注文は、そのあとにやって来る。ムソルグスキー《展覧会の絵》の管弦楽化である。

作曲年代：1914～1917年／編曲版：1919年

初演：1920年2月28日、ルネ・バトン指揮パドルー管弦楽団

楽器編成：フルート2（ピッコロ1）、オーボエ2（イングリッシュ・ホルン1）、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット1、ハーブ、弦楽

(近藤秀樹)

ムソルグスキー（ラヴェル編） 組曲「展覧会の絵」

《展覧会の絵》のピアノ原曲は、ムソルグスキーの友人だった建築家・画家のガルトマン（1834～1873）の回顧展がきっかけで書かれた（1874）。作曲者の生前は演奏も出版もされず、曲が広く知られるようになるのは1922年にラヴェルが管弦楽化してから。この編曲はロシア出身の名指揮者クーセヴィツキーの委嘱によるもので、初演もこの指揮者が振った。

もっともこの編曲は、ムソルグスキーとラヴェルの最初の出会いではない。ラヴェルは歌劇《スペインの時》（1907/1911）の作曲に際してムソルグスキーの歌劇《結婚》を参考にしたし、ストラヴィンスキーと共同で歌劇《ホヴァンシチナ》の管弦楽を手直ししている（1913）。

曲は10枚の「絵」と《プロムナード》からなる。《プロムナード》は、前奏・間奏として「絵」と「絵」をつなぎ、曲集全体の導きの糸をなす。同時にそれは、絵を見てまわる人々の気分の表現でもある。

その《プロムナード》とともに、私たちは回顧展の会場へ。第1の絵は《こびと》。醜い地の精で、地下の金銀財宝はこのこびとの管轄に属する。ぎくしゃくしたこびとの動きを、ラヴェルは多数の打楽器を交えて強調している。《プロムナード》を経て、第2の絵《古い城》へ。古城のほとりで謡う吟遊詩人。その悲しげな歌を、ラヴェルはサクソフォーンのソロに委ねた。

その歌の下で、低弦が休むことなく単調な保続音を刻む。再び《プロムナード》を経て、パリのチュイルリーの庭園を描いた第3の絵《チュイルリーの庭》へ。副題は「遊んだあとのこどものけんか」。そういえばムソルグスキーには歌曲集《こどもべや》という傑作がある。

第4の絵は《ブイドロ》。題名は「ポーランドの牛車」の謂。重々しく単調な牛車の歩みと、御者が野太い声で歌う歌（ラヴェルはこれをテューバのソロに委ねた）。遠ざかっていく牛車を見送って《プロムナード》はしばし悲しみに沈むが、そこへ割り込んでくるのが《卵のからをつけたひなの踊り》。ガルトマンの絵は、あるバレエのための衣装のデザイン画。動物好きでバレエもたくさん書いたラヴェルは、このスケルツィーノが気に入ただろう。ひなたちのバレエのあとには、2人のユダヤ人、《サミュエル・ゴールドデンベルクとシュミュイレ》が登場。管弦楽版では、裕福な前者の声は弦の分厚いユニゾンに、貧しい後者の声は弱音器付きトランペットのソロに委ねられ、両者の「格差」がいっそう際立つ。

ピアノ原曲ではこのあとに《プロムナード》が続くが、ラヴェルはこれを省いて、ただちに中部フランスの街《リモージュの市場》へと赴く。市場で喋りまくるかみさんたち。話題はどんな大ニュースなのだろう。お喋りの無窮動が頂点に達したとこ

ろで曲は急転、強烈な金管のコラールとともに、私たちは《カタコンブ》(ローマの地下墓地)へと降りる。迫害された初期のキリスト教徒たちは、ここで葬儀や埋葬を行い、密かに信仰を守ったという。曲の後半は「死せることばによる死者への語りかけ」と記され、《プロムナード》の主題がおぼろげな弦のトレモロを背景に浮かびあがる。死者たちとの対話のなかで、恐怖と悲しみは次第に和らぎ、ハーブのアルペジオとともに静穏が訪れる。

その静穏を破るのは《バーバ・ヤガーの小屋(めんどりの足の上に立つ小屋)》。

小屋に住むのはバーバ・ヤガー。ロシアの昔話に出てくる魔女で、^{うす}白に乗って空を飛び、悪い子供をつかまえて食べてしまう(ゴゴリの小説『イワン・クパーラの前夜』にも登場する)。ガルトマンの絵はバーバ・ヤガーの小屋の形をした置時計のデザイン画だが、音楽は魔女を描いている、というのが通説。だが、鶏の足を生やした小屋が森の中を歩きまわる様子を描いた絵本もあり、こちらをイメージして聞くのも楽しい。

^{ちやうりようぼつこ}跳梁跋扈する魔女の音楽は、アタックで終曲《キエフの大きな門》(「キエフの英雄たちの門」)へとなだれ込む。もともなった絵は、英雄(ボガトゥイリ)たちを称える凱旋門のデザイン画。ロシアの英雄叙事詩(ブリリーナ)にはイリヤ・ムロメツやドブリニャ・ニキーチッチといった英雄

たちが登場し、彼らの活躍するキエフの都には太陽公ヴラジーミルが君臨する(はげ山が聳えるのもキエフの近くだ)。キエフこそはルーシ(ロシア)発祥の地であり、ロシア的なものの音楽的表現に心を砕いた作曲者が、この絵を展覧会の最後に置いているのは偶然ではない。マエストロの祝祭的な音楽に続いて、ロシア聖歌が木管で厳かに歌われる。やがて《プロムナード》の主題が鐘とともに鳴り響き(ガルトマンの描いた門には鐘楼がある)、大太鼓が祝砲のように鳴るなか、曲は壮大なクライマックスを築く。

作曲年代: 1874年/ラヴェルによる編曲版: 1922年

初演: 1922年、パリ。クーセヴィツキー指揮クーセヴィツキー管弦楽団

楽器編成: フルート3(ピッコロ2)、オーボエ3(イングリッシュ・ホルン1)、クラリネット2、バス・クラリネット1、アルト・サクソフォーン1、ファゴット2、コントラファゴット1、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ1、ユーフォニウム1、ティンパニ1、グロッケンシュピール、テューブラ・ベル、シロフォン、トライアングル、ラチェット、ムチ、小太鼓、大太鼓、シンバル、サスペンデッド・シンバル、タムタム、チェレスタ1、ハーブ2、弦楽

(近藤秀樹)

LISTENING

2月定期公演の聴きどころ

チョン・ミョンフンが3年ぶりにN響の指揮台に帰ってくる。2008年はブルックナーの《交響曲第7番》とマーラーの《交響曲第9番》で感動的な名演を繰り広げたが、今回は彼の十八番というべきベルリオーズの《幻想交響曲》(Aプロ)とマーラーの《交響曲第3番》(Cプロ)が取り上げられる。



チョン・ミョンフン ©Riccardo Musacchio

1989年にチョンが36歳の若さでパリ国立オペラ(バステュー歌劇場)の音楽監督に就任したニュースは世界中の音楽ファンを驚かせた。チョンは、バステュー時代に《幻想交響曲》の録音を残し、そのCDは1995年度のレコード・アカデミー大賞を受賞した。それから15年以上経った今、チョンがN響を相手にどんな《幻想交響曲》を披露するのか、興味津々だ。また、チョンからの信頼の厚い、現代屈指のヴァイオリニスト、ジュリアン・ラクリンが独奏を務めるベートーヴェンの《ヴァイオリン協奏曲》も聴き逃せない。

宇宙的ともいえる壮大な広がりを持つマーラーの《第3番》は彼の交響曲の中

で最も長大な作品。チョンの劇的なタクトが作り出す音楽はマーラーのメモリアル・イヤールを飾る圧倒的な演奏となるに違いない。日本が世界に誇るアルトの藤村実穂子の名唱にも期待したい。



ジョナサン・ノット ©Richard Haughton

Bプロを振るバンベルク交響楽団首席指揮者であるイギリス出身のジョナサン・ノットは、かつてアンサンブル・アンテルコンタンポランの音楽監督を務めるなど、現代音楽での活躍も著しい。N響では、2009年の庄司紗矢香とのリゲティの《ヴァイオリン協奏曲》が記憶に新しい。ショスタコーヴィチの最後の交響曲である《第15番》を含め、1970年以降の作品だけでプログラムを作ってしまうところが彼らしい。ドルマンは1975年イスラエル生まれの気鋭の作曲家。打楽器独奏の入る《フローズン・イン・タイム》が日本初演される。

(山田治生)